**曹洞宗大本山總持寺・ニコニコ法話　　　　　　　　　　　　　　　　　　 令和6年11月**

 **『花団子』を供える**

**北海道 天総寺住職　谷 龍嗣老師**

皆さん「花団子」をご存知でしょうか？

大福のような形をしており、上には食紅で花びらがかたどられております。

私が住む、北海道西海岸の留萌管内南部では昔から葬儀や法事に欠かせない仏事のお供物になっております。お寺参りやお葬式の前になると、近所の女性の方々がお寺に集まり、赤の食紅で花びらを作り、黄色や緑の食紅で葉を作り、お団子の上に綺麗な花を作っては、お団子を積み重ね、仏前にお供えしておりました。

この花団子ですが、古くから地域に伝わるお供物とは知りつつも、誰がいつから始めたのか、一体どのような意味があるのかを知らずにおりました。しかし、昨年、そのルーツに出逢う事が出来ました。

青森県下北半島にある曹洞宗のお寺を訪れた時の事です。本堂に入り御本尊様の正面で手を合わせた時、仏前に一対の花団子がお供えされておりました。てっきり、地元だけのお供物だと思っていた私は、目を丸くして驚きました。

すぐに、お寺の御台所に行き檀信徒の女性の方に「どうして、花団子があるんですか？」と質問すると、その女性は「だって、ここが花団子の発祥の地だもの。そういえば、和尚さんは、北海道の留萌からきたんだものね。」と言われました。

そして、その女性は、花団子のルーツを教えてくれたのです。

「生花の無い冬場にせめて祭壇を綺麗に飾ってあげたいと作られたのが花団子なんです。

そして、昔、青森県下北半島下風呂に住む佐賀家とこの地域の方々が和尚さんの住む北海道留萌市に移住してニシン漁の漁場を開いていました。でも、青森から北海道に行った方々も色んな事情で亡くなる方もいたんです。昔はご遺体を青森まで運ぶわけにはいかなかった。だから、せめて故郷のお供物をお供えしたかったと聞いています。」と話してくれました。

生まれ故郷には、戻れなくとも、せめて、地元の味と香りを亡き人に届けたい。そんな思いに突き動かされる様に、思いを込めて作ったのが花団子だと気づかされました。そして、その思いが北海道の留萌に住む方々に伝わり今に至っていました。

最後にその女性は、「花団子は、手間もかかるし作るのは大変だけど『仏様が喜んでくれているかな』と思うと、供えたこちらがほっとして安心するの」と言ってくれました。

供養は「心をカタチにして供える」という意味があります。そして、供養の漢字は、「人」が「共」に心が「養われる」と書きます。供えた側も供えられた側も心が「ほっとする」。そんな願いが時と場所を超え、受け継がれております。